

チャレンジする Someone NEWS

～挑戦者の履歴書

第25回

ねじめ正一氏 (詩人、作家)

『風の棲む町』：風は持続可能なつながり

一般社団法人 洗楓座 代表理事 佐藤建吉

▼「風」つながり

筆者は、風力発電の普及について大学や学会や地域で活動してきた。その活動にもいろいろあり、風力エネルギー学会の会報『風力エネルギー』には、筆者の20年間活動の経緯を振り返り、今回は「ね」の順であった。そこで、ねじめ正一氏を紹介させて頂くことにした。ねじめ正一氏の著作は、息子の中学の国語教科書で読んだことがあり、もちろん、氏に会い、その小説を構想し誕生したという。今回は、『風の棲む町』を素材として、その著者のねじめ正一氏を紹介させて頂く。

生涯(辻井喬)などで、その蔵書の中に、ねじめ正一著の『風の棲む町』という本があった。酒田大火は、昭和51年10月、強風の夜に発生した大火事であった。当時、筆者は鶴岡を離れ千葉で大学生生活をしていて、テレビでは知っていた。いまから45年前の出来事であった。

もちろん、著者のねじめ正一氏は、大火当時に酒田に居たわけではないが、ある出会いにより、この小説を構想し誕生したという。今回は、『風の棲む町』を素材として、その著者のねじめ正一氏を紹介させて頂く。

ねじめ正一氏は、戦後の昭和23年(1948年)6月に、東京都杉並区高円寺に誕生した。いわゆる団塊の世代になる。本名は、禰正一であり、禰姓は鹿角島の大隅半島辺りの豪族がルーツである。著者「ねじめ正一」として、『詩集』に『高円寺純情商店街』は、直木賞を受賞。以降の著作も受賞が続いた。この活動は、ほかの人

校の教科書にも掲載され、NHKなどのメディア出演もあり、「ねじめ正一」のこだわりやパーソナリティが広く注目されるようになった。筆者がとくに注目するのは、深い関わりを感じた『風の棲む町』である。1994年7月、95年5月に『放送文化』に連載された作品で、96年10月に単行本として発行された。その4年後には、文庫本の『青春ぐんぐん書店』として、改訂版『風の棲む町』(2000年)が出版された。

ねじめ氏は、詩集、小説、エッセイなど、言葉の魅力と表現力に裏打ちされた著者や朗読、さらにはインタビューなどで、文芸、社会への関わりを進めている。その熱中魂は、野球で発揮されたものにほかならない。それが人生をつくり出したのでは、と思われ。

また執筆活動や文芸活動は、子供の時からのお家業であった乾物屋の店番や、その後の民芸店の経営というダブルワークとしてなされた。この活動は、ほかの人

直ぐにも流れるが、旋毛(つむじ)にもなる。しかも強弱と息づく。風は透明で無垢でもあるが、地面など環境と結びつき埃っぽくもなる。「人間風」のあり様である。拓也も揺れる。高校生として、友達とつきあ

この小説『風の棲む町』は、題名から「風」に「町」と三つの要素に分けられる。しかし、本当はこの三つがさらに多面的にとらえられストリーになっていく。「風」は、風力発電や風の車(原動力)としての「自然風」であるが、「人間風」という側面も欠かさない。「風の時代」などと言われるが、そこにもこの二つがある。この小説も二つの側面がある。大火の原因は前者であるが、酒田の人々の暮らしは後者になる。

小説に登場するのは主人公としての拓也、至山が、帰省すれば存在感のある風になる。同級生の受け止めも多様である。青春の風は、それぞれが発信源であり、同調したり強調したり、離れたりする。高校の音楽教師の叔父

まさに、題名のように皆が酒田という土地柄の風であり、棲んでいる。「住む」ではなく「棲む」が相応しい。「町」は、歴史と地勢の影響を受け止めも風が、そして経済が土壌となっていて、消火作業に消防が対策する。強風に

この小説では、次のような描写がある。いまと拓也であり現在は「掘ぐんぐん書店」の経営者である堀弘明氏との出会いが大きい。朗読会、その後も何度か継続して開催されている。

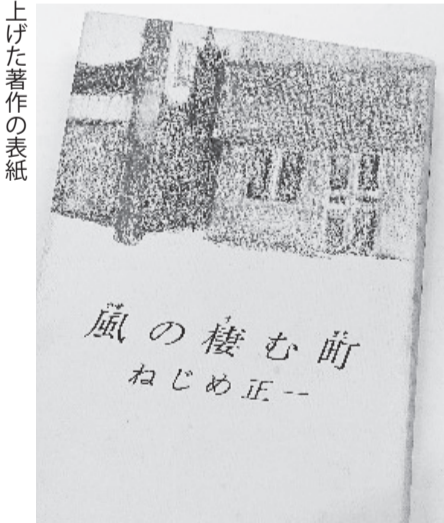
このコラムを執筆するにあたって、ねじめ正一氏にインタビューした。ねじめ氏にインタビューする機会をつくっていた。当時の一部は現実である。生き生きとした描写であり、時代背景である。また、万引きの記述もある。書店でも万引きは、個々の困った迷惑行為であり、ねじめ氏も民芸店で経験されたことだろう。

連載



インタビュー時のねじめ氏(阿佐ヶ谷、2月1日)

ねじめ正一氏は、戦後の昭和23年(1948年)6月に、東京都杉並区高円寺に誕生した。いわゆる団塊の世代になる。本名は、禰正一であり、禰姓は鹿角島の大隅半島辺りの豪族がルーツである。著者「ねじめ正一」として、『詩集』に『高円寺純情商店街』は、直木賞を受賞。以降の著作も受賞が続いた。この活動は、ほかの人



お会いしてインタビューした。その中で、多くの作家や文芸家、あるいは建築家との交友や出会いを知った。特に印象的だったのは、赤瀬川原平と(第49回大会、1回戦で敗退)。これは、同校がその後においてもなし得ていない快挙であった。野球好きのねじめ氏が小説に書き残すには最適な頑張りとなった。

ねじめ氏がこの小説を構想した契機は、朗読会で酒田を訪ねたことにある。その朗読会を企画し実施された地元阿蘇市に、甲子園に初出場した(第49回大会、1回戦で敗退)。これは、同校がその後においてもなし得ていない快挙であった。野球好きのねじめ氏が小説に書き残すには最適な頑張りとなった。